



IBJ* 防除情報

第98号

(*Ishihara Bioscience Japan=石原バイオサイエンスの略)

ご説明
します

今月の特集



果樹カメムシ

果樹カメムシとは

果樹を加害するカメムシ類は、全国で三十数種が記録されています。その中にはイネを加害し、斑点米の原因となるクモヘリカメムシ、ミナミアオカメムシ、ダイズを加害するホソヘリカメムシ等も含まれています。しかし、これらのカメムシによる果樹の被害は、全体から見るとごく一部で、被害の大部分は次の3種によってもたらされます。

① チャバネアオカメムシ

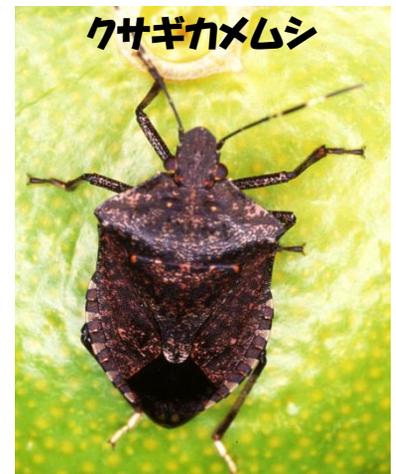
沖縄から北海道まで全国に分布し、九州北部から東北南部まで広い地域で果樹カメムシの優占種になっています。年間で1~2回発生し、山林周辺部の落葉下で越冬を行います。

② ツヤアオカメムシ

西日本を中心にした西南暖地で発生量が多く、九州、四国南部、紀伊半島南部で優占種になっています。

③ クサギカメムシ

全国に分布しますが、西日本では少なく、中部地方や東北地方など寒冷地で主要な加害種です。年間の発生は冷涼地で1回、温暖地で2回となります。家屋や作業小屋などの雨の当たらない場所で越冬します。



カメムシの餌

イネやダイズを加害するカメムシの多くは、加害作物上で繁殖しますが、果樹カメムシは果樹園で繁殖しません（クサギカメムシはまれに繁殖することがあります）。そのため水田やダイズ畑では、成虫から幼虫までいろいろな生育ステージのカメムシが見られますが、果樹園ではまずカメムシの幼虫を見かけません。大発生したときに若齢幼虫をたまに見かけますが、クサギカメムシ以外は果樹園では成虫まで育ちません。

果樹カメムシは山林で繁殖した成虫が果樹園にやってきて果実を吸汁し、去ってだけです。

では、果樹カメムシの本当の餌は何なのでしょう。成虫が餌にする植物は100種以上が知られていますが、発育した幼虫が恒常的に見られる寄主植物は案外少なく、チャバネアオカメムシでは20種、クサギカメムシでは10種、ツヤアオカメムシではわずか3種です。果樹カメムシの幼虫が発育できる餌は限られており、**針葉樹の球果やサクラ、クワ、サンゴジュ、ウメモドキなどの“種子を吸汁できる果実”以外では成虫まで育ちません。**

つまり、種子こそが彼らの本来の餌、よい餌といえます。特に成熟したヒノキやスギの球果にある種子は彼らにとって主食とも言える餌です。これらには幼虫の発育のみならず、成虫の雌の卵巣成熟に不可欠な脂肪などの栄養分が多く含まれているからです。サクラやクワなどの実を吸汁するのも、その中の種子成分を吸うためです。

逆に言うと、本来の餌でなくても植物の成熟した種子であれば、十分に餌になります。果樹カメムシを人工飼育する際に生のラッカセイを餌に与えます。野生の果樹カメムシはラッカセイを餌にする機会はありませんが、こうして与えれば十分に幼虫は育ちます。これも果樹カメムシが種子を餌にする「種子カメムシ」だからです。

なぜカメムシは果樹を加害するのか

先に述べましたように、果樹はカメムシにとってけっしてよい餌ではありません。ナシの果実を与えてもカメムシの幼虫は育ちませんし、体重が増加するわけでもありません。水を与えたのとほとんど同じで吸水源でしかありません。

では、なぜ果樹カメムシは果実を加害するのでしょうか。ここで高木一夫博士の仮説を紹介したいと思います。

『カメムシの幼虫は果実では発育しないのに、その中の種子で飼育すると成虫まで育つ。つまり、カメムシが果樹を加害するのは本能的にある程度成熟した種子をもつ果実を餌として認識しているせいかもしれない』というのです。



カメムシの発生量の予測

果樹カメムシが多くの果樹害虫と違うのは、発生量と被害量が必ずしも一致しないこと、そして大発生した年に大被害が出るとは限らないことです。

上述したように、カメムシは山林で増殖し、餌が不足すると果樹園に飛来して果実を加害します。しかし、この餌の“不足”は、相対的なもので、球果の絶対量が多くても、さらにそれよりカメムシの数が多ければ“不足”します。絶対量が少なくてもカメムシがそれ以上に少なければ“十分”ということになります。後者の場合、おそらく果樹園への飛来はなく、飛来しても被害は軽いはずです。

問題は多くの餌の量が中途半端で、当年に羽化した成虫が越冬するまでの間に餌不足になり、果樹園が被害を受けることです。

カメムシの防除

果樹カメムシは成虫が果樹園に飛来して、直ちに果実を加害します。そのため、被害防止には即効的な薬剤を使用しなければいけません。殺虫効果が高くても効果発現までの時間が長い剤は実用性がありません。

このような中で、果樹カメムシの基幹剤として期待できるのは、**有機リン系**、**合成ピレスロイド系**、**ネオニコチノイド系**の各殺虫剤で、カメムシの体に付着すると死ぬか、活動を停止させます。

速効性の有機リン剤

有機リン剤は効果発現の早さでは合成ピレスロイド剤に勝ります。問題は残効期間が短いことで、露地ではせいぜい1~3日です。しかし、逆にいえば天敵類に優しい(影響期間が短い)ということで、場合によっては長所になります。

残効が長い合成ピレスロイド剤

合成ピレスロイド剤の特徴は殺虫活性だけでなく、殺虫効果がなくなったあとも長く吸汁阻害効果を発揮することです。

吸汁阻害効果のネオニコチノイド剤

ネオニコチノイド剤は有機リン剤や合成ピレスロイド剤と異なり、カメムシに対する殺虫活性は弱く、吸汁行動の阻害による被害防止が主な効果です。残効期間は一般に長いとされています。



石原の農薬登録情報



- 2019年7月17日～8月15日までの間に登録された弊社の新農薬（適用拡大を含む）は、次の通りです。
（下線部が適用拡大になりました。）

7月18日 適用拡大 トアロー水和剤CT

<作物名の追加>

- ・ 作物名「飼料用とうもろこし」を追加する。

作物名	適用害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	BTを含む農薬の総使用回数
<u>飼料用とうもろこし</u>	アワノメイガ	1,000倍	100～300L /10a	発生初期 但し収穫前日まで	—	散布	—

（該当作物にかかる部分のみ記載）

<使用上の注意事項の変更・追加>

なし

8月7日 適用拡大 フロンサイドSC

<使用時期の変更>

- ・ 作物名「キウイフルーツ」の使用手法「散布」の使用時期「収穫7日前まで」を「収穫30日前まで」に変更する。

★本内容は使用制限となる負の適用拡大です

作物名	適用病害虫名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤の使用回数	使用方法	フルアジナムを含む農薬の総使用回数
キウイフルーツ	白紋羽病	500倍	100L/樹	収穫30日前まで	1回	土壌灌注	2回以内 （散布は1回以内、 土壌灌注は1回以内）
	灰色かび病 果実軟腐病	2,000倍	200～700L /10a	<u>収穫30日前まで</u>		散布	

（該当作物にかかる部分のみ記載）

<使用上の注意事項の変更・追加>

なし

弊社では、圃場の土壌を御送付頂き、その土壌中のセンチウ量を測定し、防除計画の御参考にして頂く無料サービスを継続実施しております。



ISK 石原バイオサイエンス株式会社 本社 普及部

〒102-0071 東京都千代田区富士見2-10-2

TEL 03-6256-9170 FAX 03-3263-2078

ホームページ アドレス <http://ibj.iskweb.co.jp>

センチウ検定
無料キャンペーン
実施中